

汚泥の燃焼灰 肥料に活用



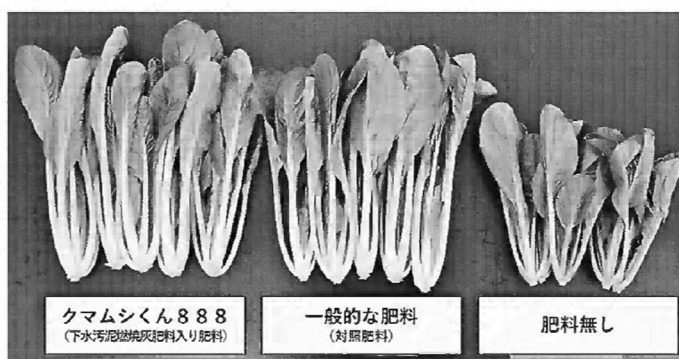
戸田の下水処理場で発生

県PR 安定供給へ期待

県の下水処理場から出る汚泥の燃焼灰を有効活用した肥料が製品化され、先月から販売が始まった。国内で使われる肥料の多くは海外産で、価格上昇が懸念される。燃焼灰が原料の肥料が広がれば、安定供給につながると期待されている。

肥料の原料は、県荒川——水循環センター（戸田市）——で下水を処理する過程で発

①下水汚泥の燃焼灰を原料に県が作った肥料（左）と、製品化された肥料「クマムシくん888」②「クマムシくん888」は栽培試験の結果、一般的な肥料と同等の効果が認められた（いずれも県提供）



だ。これまではセメントの原料として再利用していた。

県は汚泥を肥料の原料として活用するため2024年、全国の自治体で初めて、農林水産省の規格に登録した。同省が23年、下水汚泥などを活用した肥料の安定供給を目的に、新たな肥料の規格を創設したのに対応した。

今回、汚泥の燃焼灰を使って肥料を製品化したのは、肥料製造販売業「朝日アグリア」（東京）。肥料の原料を海外に頼っている現状を変えようと、国内で利用されていない資源の活用に取り組んでいるという。

製品は下水処理の過程で使う微生物「クマムシ」に由来し、「クマムシくん888」と名付けた。肥料の3要素である窒素、リン酸、

下水から汚れを取り除く微生物「クマムシ」がモチーフのキャラクター「クマムシくん」



カリウムを8%ずつ使っているという。

県などが実施した野菜の栽培試験では、クマムシくん888は一般的な肥料と同等の効果が認められ、発売に踏み切った。県内のJAで取り扱っている。

県は下水道のキャラクター「クマムシくん」を作り、親しみが持てるようPR。下水道事業課の担当者は「毎日発生する下水汚泥の燃焼灰を利用すれば、サーキュラーエコノミー（循環経済）に貢献できる。肥料の安定供給にもつながる」と話す。